

## 展覧会開催報告 2001.3 - 7

### 展 示 部 会

#### 竹西寛子展～その人と作品～

本年3月、教育学部でながく教鞭をとっておられた小説家・文芸評論家の竹西寛子先生が早稲田大学芸術功労者として表彰された。図書館ではこれを記念し、3月23日から4月19日にかけて「竹西寛子展～その人と作品～」を開催した。

この時期、展示室ではすでに「館蔵資料でたどる20世紀の歴史展」を開催することが決まっており、急速、図書館4階の図書館ラウンジを会場としたのだが、展示ケース4台に加え壁面やケース周辺にパーテーションを運び込むと、ちょっとしたギャラリー風となった。

展示資料は館蔵の稲門ライブラリーにある竹西先生の著作を中心に考えていたのだが、教育学部の小林保治教授、東郷克美教授の御尽力により、竹西先生ご自身のご協力をいただけることとなり、その結果、自筆原稿や先生がこれまでに受賞されたさまざまな文学賞の関係資料、さらには幼少時からの写真等多くの貴重な資料が出陳されて、充実した内容の濃い展示とすることができた。特に写真には竹西先生の言葉（竹西氏の随筆などから小林先生が抜粋）を添えることでいっそうの広がりを見せ、来場者の興味を引いていた。

会場までの導線がわかりにくいこともあり、どれほどの来場者があるか不安だったが、竹西先生の作品の読者の方々をはじめ多くの学外者も足を運んでくださり、予想以上に盛況であった。また会期中、竹西先生と一緒に作家の永井路子、杉本苑子、俳人の和田知子の各氏が来場された。

本展示開催にあたって多大なご尽力を賜った小林先生、東郷先生、そしてなにより、資料提供だけでなく、展示全般にわたってさまざまな助言をしてくださった竹内寛子先生に改めて厚く御礼申し上げる次第である。（文責・藤原）

#### 館蔵資料でたどる20世紀の歴史

卒業・入学のシーズンである3月末から4月中旬にかけて、例年どおり館蔵資料による展示をおこなった。

テーマは、1999年が「日本文学史」昨年は「日本の歴史」と続いているが、新世紀の幕開けである2001年は「20世紀の歴史」をとりあげてみた。

展示したものは、日露戦争・第一次世界大戦・関東大震災・二・二六事件・第二次世界大戦・文化大革命・ベルリンの壁崩壊など、20世紀の歴史ドキュメント資料約70点である。

戦争や革命、災害などと、どうしても暗いニュースが多くなってしまったが、会場に置いた観覧者による感想ノートを見ると、おおむね好評だったようである。学生を中心としてかなり多くの来場者があった。館蔵資料に加えて、館員個人蔵の雑誌や新聞、ポスターなど数点を参考資料として補ったことで、インパクトのある、わかりやすい展示になったのではないだろうか。

ほぼ同時期に「竹西寛子展」を開催したため準備にかかる時間が限られてしまい、目録などは簡単なものにせざるを得なかったのが残念である。

会期は3月24日（土）より4月24日（火）まで、総合学術情報センター2階展示室において開催した。卒業式と入学式が行われた3月25日（日）と4月1日（日）も開室した。（文責・大坪）



「館蔵資料でたどる20世紀の歴史」展

## 挿絵 - 物語を彩るイメージの世界 -

例年5月に行われる「オール早稲田文化週間」参加の図書館企画展示として、5月10日(木)より2階展示室にて標記の展覧会をおこなった。

展示のテーマもだんだんとネタ切れになってくるので、ともすれば以前にやった蘭学とか古文書とか引札、双六、錦絵などのリメイクでお茶をにごしたいという誘惑にかられるが、つねに新しいテーマを開拓するのが本筋であると考え、ない知恵をしぼっている。今回は絵巻物、奈良絵本から近代小説の口絵まで、「さし絵」にスポットをあててみた。

簡単でたのしい展示のように見えるかもしれないが実は準備が大変で、明治期の小説本の木版色刷りの口絵がどんな場面なのか解説を書くために、委員が手分けして古めかしい小説を読まねばならなかった。明治期小説の口絵は水野年方、梶田半古、鍋木清方など高名な日本画家が筆をとっていて、なかなか見ごたえのあるものが多い。会期中には、明治期小説本のコレクションを寄贈下さった校友・故手塚昌行氏の母堂手塚幸子さんも見えられ、感慨深げに展示に見入っておられた。

早稲田大学図書館には、瀧澤馬琴、坪内逍遙ら著者みずからが画家にさし絵のイメージを指定した、「挿絵指定画」というめずらしい原本資料がある。挿絵そのものとならべてこれらの資料を展示したので展示に厚みがでた。

評判は上々で、会場に置いたノートには「内容への興味をそそられる説明がよかつた」「とても興味深くおもしろかった。また、企画してほしい」「これだけのものを展示公開できる早大はすばらしい。図録が欲しい」などといった好意的な感想が相次ぎ、思わず6月下旬まで会期を延長したほどだった。この企画は10月末に千葉県鴨川市立図書館でも開催した。(文責・松下)

## 錦絵にみる近代日本の夜明け展

6月30日から7月15日まで、「早稲田フェスタ in 遠州2001」の関連企画として、静岡県磐田市立図書館において「錦絵にみる近代日本の夜明け展」を開催した。

昨年、この「早稲田フェスタ」で新企画として早稲田大学図書館の所蔵資料を用いた展覧会「江

戸・明治の広告展」を初めて開催し、大変に好評を得たため、本年も引き続き展覧会を行うことになった。

当館の資料の中でも、観覧者が興味を抱きやすい身近な貴重資料を展覧するという考え方は前回と変わらず、その意味で今回は「錦絵」を選んだ。幕末から明治にかけて作られた多色摺り木版画による「錦絵」は、当時の世相や庶民生活、事件や政治事情、社会諷刺などを細かく描き込み報道の役割も果たしていたといえる。技術的にも、絵師、彫師、刷師の技が相俟ってレベルが高く、芸術作品の美しさも十分に備えている。黒船来航から横浜の開港、幕末の動乱、文明開化の街並、自由民権運動から国会開設にいたるさまざまな場面を活写した錦絵60余点が展示され、会場の壁面は色彩に満ち、賑やかであった。

観覧者にアンケートを実施したが、「いちばん興味をもって観た資料はなんですか」という質問の答えで一番多かったものは「西南戦争」であった。西郷人気なのであろうか。

前回同様「中日新聞」「静岡新聞」で当展の開催情報が掲載され、ポスターや案内葉書も効果的に配布されたこともあって、地元磐田、浜松での評判は高く、入場者は1,693人であった。

(文責・岩佐)

## これからの展覧会予告

12/12(水)~1/26(土) 於 展示室

「漂流 異界を見た人々」展

鎖国下にあった江戸時代、船が難破して心ならずもロシアへ漂着した大黒屋光太夫をはじめ、異国へ漂流した人々についての資料と、日本・世界の漂流文学について展示する。

おもな展示品：北槎聞略付図・芝蘭堂新元会図・清国漂流記・海外新聞ほか

3/20(水)~4月末 於 展示室

「描かれた生き物たち 館蔵資料にみる動植物図譜」展

館蔵資料のうちから、さまざまな時代に描かれた動植物の絵をえらび並べる。人間とともに生きてきた鳥獣、草木のすがたから浮かび上がる人類文化史の断面。